

## 2010 年度 立命館学校教育研究会 講演会

2010 年 6 月 6 日（日）立命館学校教育研究会 講演会のご報告



会長 崎野 隆より開会の挨拶



学校現場の今日的課題を取り上げ、現職の  
教員を中心に会場は満席となった



小野田 正利先生の熱気あふれる講演に聴  
衆は聞き入った



懇親会には校友教員、教育関係者、学生が  
集い、交流が深められた

会長 崎野 隆より開会の挨拶

学校現場の今日的課題を取り上げ、現職の教員を中心に会場は満席となった

小野田 正利先生の熱気あふれる講演に聴衆は聞き入った

懇親会には校友教員、教育関係者、学生が集い、交流が深められた

2010 年 6 月 6 日（日）、「立命館大学ホームカミングデー2010」の企画にも位置づけて、2010 年度立命館学校教育研究会「講演会」が開催されました。小野田正利先生（大阪大学大学院人間科学研究科教授）を講師に招き、「今、教師に求められる実践力～保護者と向き合う気持ちと教職員の共同性～」と題した講演に、衣笠キャンパスの創思館カンファレンスルームは、約 140 名の参加者で盛会となりました。講演会後の懇親会においては、約 50 名

の参加で、校友教員や教育関係者と本学学生との交流が積極的に図られました。

講演の冒頭で、小野田先生は、ある青年教師の自殺に触れながら、普通の教師が普通に活躍できる学校を作っていきたい。日本社会全体を覆っている息苦しさを、教育を通して考えていきたいと強調されました。また、保護者と学校が、うまく手をつなげないという背景には、親の孤独と教師の孤立といった状況があるのではないかと指摘されました。「自子中心主義」だけでなく、子どものことよりも自分の生活を守ることで精一杯な状況があるのではないかと指摘されました。

特に、この間進めてこられた「いちゃもん研究」について、「いちゃもん」とは言動を表す言葉であり、保護者の人格を否定するものではないこと。保護者が振り上げた拳自体を見て動揺するのではなく、どんなエネルギーが拳を突き上げさせているのかを見極めていくことの重要性を強調されました。子どもは、親と教師のどちらの人質でもなく、共同の課題は、「子どもに自立と自信をどうつけていくのか、子どもをどう伸ばしていくのか」であること。教師の理屈と親の思いのズレを埋めていくためには、何か事が起きたときには、事実の確認を十分に行い、子どもの話を聴かない教師や子どもの話しか聴かない親をやめて、まずお互いに話し合い語り合おうと強調されました。

さらに、学校は善意の集団であり、何とか改善をと考える傾向があるが、保護者の抱える課題など、それぞれに背景があり、簡単には解決できない場合もある。現状維持を評価しながら可とするケースもある。学校だけが課題を抱え込むのではなく、福祉、医療、心理、教育、司法などの専門機関、行政機関などと連携しながら取り組むことも重要である。保護者と教師が、お互いに暴走しない、させないためにも、「ごく普通の市民感覚を持ち伝えていく」「怒りの着火地点と爆発地点は違うことがある」「お互いの安全のために、適切な距離を取り、その場から抜け出すことも必要な場合がある」「テクニックよりもケース会議を積み重ねる」…といった指摘は、説得力がありました。

最後に小野田先生は、教師の同僚性の形成に触れて、「一見無駄と思える時間と空間の共有から育つ（職場に白い丸いテーブルを）、汗と笑いの中で育つ」と強調されました。同時に、教師の実践力について、「教科指導の力」「子どもをとらえる力」を指摘され、保護者と対応する力は、経験によって積み重なっていくものであり、保護者対応の中でも、子どもについて話題を振っていくと、保護者は落ち着いていくと指摘されました。講演の冒頭では、教師は70%の力でゆとりを持って保護者に向き合うことを強調されましたが、「瞬間最大出力150%」とご自身が言われたように、非常にエネルギーでユーモアにあふれ、具体的な事例を織り交ぜ重要な指摘をしていただいた講演には参加者の共感が広がりました。

文責：春日井 敏之<立命館学校教育研究会運営委員>